



政府首脳や外交官は、初対面の相手に何を語りかけるべきか。16世紀のイタリア人外交官グアッツォは次のように述べている。

「船頭は風のことを、牛飼いは牛のことを考えていなければならない、戦士は自分の傷を、羊飼いはヒツジの群れを数えていなければならない（モンテニユ「エセー」1の16）。要は、礼節ある会話で相手と心地よい関係を築

くよう心掛けるべきだということだろう。

しかし高市首相は昨秋、中国の習近平国家主席との初的首脳会談で、香港や新疆ウイグル自治区などの人権問題について少しも遠慮せず持論を述べた。グアツ

ツォの公理に照らせば、習氏の面子をつぶしたことは間違いないだろう。

さらに高市氏は、直後の国会論戦で台湾有事に関して、集団的自衛権の行使が可能な存立危機事態になりうると明言した。習氏はこ

のタイミングに疑問を感じた向きもいるはずだ。とはいえ、「夫れ愚者は毎多く、不肖者は自ら賢とす」という言葉もある。あ

あ言うべきでなかった、こう表現すべきだったと閣僚経験者らが繰り言を並べる

党におもねる卑屈さを露呈するだけではないか。日本政府は、1972年の日中共同声明において、

中国が中国の唯一の合法政府だと「承認」した。台湾を中国の一部であると位置づける中国の「立

持しながら、台湾問題が当事者中心の話し合いで解決されることにある。

高市氏が過去の政権と違って中国共産党への幻想を排し、「曖昧戦略」を避け

たのは、彼女の内面に福沢諭吉の「瘦我慢の説」（1891年）に近い信念があるからではないか。

福沢によれば「自国の衰頹に際して、敵に対して固

より勝算なき場合にても、千辛万苦、力のあらん限り」を尽くし、ぎりぎりの所で和戦を決めるのは「立国の公道」にして国民が国に貢献する「義務」なのだ。これを「瘦我慢」という。

（2面に続く）



山内 昌之

東大名誉教授

高市外交

対中国「瘦我慢」のすすめ

れを内政干渉だとして、高市氏の失脚を工作する決意を固めたと思われる。

高市氏の答弁は、これまでの集団的自衛権の発動に関わる政府見解を継承している。それでも、首相の胆

振る舞いは感心できない。ましてや、首相答弁を撤回すれば中国が納得するな

どという主張は、「溺れてから後に助かる道を探ね、迷った後に路を尋ねる」

（「晏子春秋」5の20）より多くの日本国民の願いは、東シナ海の安定と秩序を維

場を十分理解し、尊重する

と慎重に構えた。中国の「立場」をすぐに「承認」しなかったのは、

台湾を実効支配する政治主体が別に存在したからだ。多くの日本国民の願いは、東シナ海の安定と秩序を維



1面の続き

山内昌之氏 1947年生
まれ。カイロ大客員助教授、
ハーバード大客員研究員、東
大中東地域研究センター長な
どを経てムハンマド5世大特
別客員教授、武蔵野大客員教
授、中東調査会常任理事。

日本の歴代政権は、日中
の力関係が今のように変わ
る前も、東シナ海の日中中
間線付近で中国がガス田を
掘削し、資源が奪われる危
険に手を打たなかった。
福沢諭吉は、国と国の交
際では普段から「瘦我慢」
を忘れるなど強調した。

オランダやベルギーのよ
うな小国が、仏独2大国の
間で苦労して「小政府」を
維持するのはなぜか。大国
に併合される方が「安楽」
なはずだと、福沢は疑問を
呈した。そして、「なおそ
の独立を張て動かさるは小
国の瘦我慢にして、我慢、
よく国の榮譽を保つものと
云うべし」と小国の意地に
答えを求めた。

時機を待ち 冷静対応を

昨年末の中国軍の台湾包
囲演習が、力による現状変
更の野心につながるとして
中国に抗議する動きは、日
本や豪州、フィリピンはじ
め欧州連合(EU)、英仏
独など自由と民主主義と法
の支配を共通の価値観とす
る国々に広がった。各国と
も行き着くところ、福沢の
「瘦我慢」に通じるエスプ
リを持っているのだ。

困難な政治的未來を引き
寄せた高市首相と、日本最
初の女性宰相から不意打ち
をくらった習近平氏。両者
の確執は、たやすく解消さ
れそうにない。

「時至らざれば、強いて
生ずべからざるなり」(時
節が到来しないうちは、い
くら力んでみても物は生ま
れない)
春秋時代の越王勾践に謀
臣范蠡が行った助言である
。「説苑」)。現代の日本
人であれば、平和的に粘り
強く適切な時節到来を待つ
べきだと高市氏に助言する
面からは争わなかった。常
に自分の姿を相手に見せな
いか、カルタゴ主力から距
離をとったため、「戦いを
先延ばしして、どれほど威
嚇されても、その腰を折る
遅滞の戦術家」として後世
に名を残した(「ボエニ
戦争の歌」7歌)。

中国は、対日制裁のレベ
ルを観光渡航の自粛などが
ら軍民両用品の禁輸に引き
上げた。通商的には自国も
返り血を浴びる悪手だ。
ファビウスは戦闘をなる
べく回避した。高市氏も尖
閣諸島をめぐる緊張増大や
中国在留邦人の不法拘束を
阻むために衝突回避と人命
尊重を優先しつつ、半導体
の核心素材・フォトレジス
トや、精密製造装置センサ
ーなどの輸出管理といった
対抗措置を相上(せうじやう)に載せる
人なのかもしれない。

ファビウスは、危険を冒
して決戦を仕掛けるリター
ーではなかった。むしろ最
初は味方にも見くびられ、
「臆病で戦いを怖がってい
る」と中傷されたほど慎重
であった。それでもファビ
ウスはハンニバルの挑戦に
応じず、これまでとは異質
のタイプ指導者として相
手に不安を抱かせた(リウ
イウス「ローマ建国以来の
歴史」5)。

高市氏も、これまで中国
に叩頭せんばかりだった日
本の政治家とは異なる、習
氏の想像力が及ばない日本
人なのかもしれない。

たとえ習氏が台湾侵攻に
踏み切り、古代中国人のい
う「小さな喜び」(戦闘の
勝利)を得たとしても、大
きな犠牲と国際的孤立を招
いてしまえば、中国の命運
に開く「大きな憂い」は
深まるだけだ。それは、習
独裁体制の脆弱性を直撃
するビュロスの勝利、つま
り損得勘定の合わない勝ち
にほかならない。

中国のレアアース(希土
類)禁輸が報じられたが、
日本も1月から、南鳥島沖
の深海底6000メートルの下に
眠るレアアース泥の試掘に
乗り出した。

英文は金曜日のジャパン・
ニュースに掲載予定です